

一人一人の勇氣と平和

一宮市立浅井中学校 一年

矢野 ヤノ めぐみ めぐみ

「私は二回の奇跡で今ここに生きとる。これは私の曾祖母の口癖だ。」

第二次世界大戦が始まったころ小学生だった曾祖母は、父親の仕事の都合で満州に住んでいたそうだ。満州はとても寒かった。冬になると運動場に水をまきスケート場にして遊んでいたと教えてくれた。

日々戦争が激しくなり、帰国を決めた曾祖母一家は、当日予定の船に間に合わず、次の便に乘らせてもらった。曾祖母は日本に帰ってきて驚いた。何と本来乗る予定だった船が魚雷によって沈没し、全員船と共に海に沈んでしまったと知ったからだ。「それを聞いた時、背筋がゾッとした」と曾祖母は体を震わせた。これが一回目の奇跡。

二回目は日本に戻ってきてからしばらく経った時だった。帰国後名古屋に住んでいた曾祖母は、毎日の様に空襲に合っていた。空襲

警報が鳴ると、父と母は家を守るためバケツに水を組みスタンバイし、曾祖母は当時二歳だった弟をおぶり近くの防空壕に走って逃げた。そんな役割分担がされていた。ある日いつもの様にサイレンが鳴り弟をおぶった曾祖母は防空壕へ逃げ込んだ。その時「ゴロン」と防空壕の目の前に爆弾が転がり込み、曾祖母は反射的に目を閉じた。この時の事を「もう覚悟を決めた」と今曾祖母が振り返る事が出来るのは、それが運良く不発弾だったからだ。

その話を聞いた時、今自分がここに生きている事は奇跡の連続の先の出来事な人だと、心から生きててくれてありがとうと思った。と同時に死と隣り合わせな時代にゾッとした。「私の周りで戦争をしたがっていた人はどこにもいなかった」と曾祖母は言った。では何故戦争がこんなにも長く続いたのか。何故誰も止めようと言い出せなかったのか。原因は勇気の足りなさと同調圧力にあると

私は思う。世界規模で考えるのは難しいから自分のクラスに置き換えて考えてみた。

例えばクラスに大きな声で自己主張する子がいるとする。初めは何となく遠巻きにそれを見ていた子もそれに同調しだす。私は反対の考えを持っていても、皆に何を言われるか分からないし、結局声を上げる事なく身を任せる。仮にそれが誰かを悲しませるような良くない顛末になりそうでも「私がやり始めた事じゃない」と言い訳しながら、それ以

上想像する事を止めてしまおう。戦争でクラスの日常を投影したもののかもしれない。

だとしたら、平和の為には何が必要なのか。それは「勇気」だ。駄目な事は駄目と言える勇気。時に自分の利益に反しても良心に従って声をあげる勇気。

私は思う。皆の勇気が大きな声になった時世界は平和への第一歩を踏み出す事が出来るのだと。